

取材報告

寺 西 裕加恵

(一) デフォレスト家の跡を訪ねて―仙台

一九九三年七月二日は、神戸女学院第五代院長デフォレスト女史(Miss Charlotte Burgess DeForest, 1879-1973.)の帰天二〇年目にあたった。また一九九四年には、女史の父君、デフォレスト博士(Dr. John Hyde DeForest, 1844-1911.)の生誕一五〇周年を迎える。このたびは神戸女学院同窓会仙台支部の皆様のお世話によりデフォレスト女史召天二十周年記念祭が持たれ、この機会に学院関係並びにデフォレスト家に関係する史料を収集すべく、仙台を訪れた。

七月一日の日中、東北学院を訪問。史料室は現在は広報室の一部門となっていて、広報室としては学報等の編集・発行を行なっている。で室員は三名いるが、史料関係の担当は我々を迎えて下さった松浦平蔵広報室長お一人とのこと。松浦氏のおとりなしにより、『東北学院百年史』の執筆に関わられた宗教部長の出村 彰教授の研究室をお訪ねしてお話をうかがったのち、デフォレスト先生ご一家が居住なさった家が東北学院内に現存しているとのこと、家の間取り図をいただき、建物内を見せていただくことになった。また市内の関連ある場所へもご案内いただけること

になり、東北学院中高部で教鞭をとっておられ、同じく『百年史』の執筆をなさった竹井一夫先生が、史跡にお詳しいとのこと、ご同行下さった。

まずデフォレスト先生の家を見せていただいた。デフォレスト女史の『わが心の自叙伝』の中に出てくる「片平丁と六軒丁とかどの広い土地」の「西洋館」で、現在は、その後に入居なさった宣教師の先生の名前にちなんで「シップル館」と呼ばれており、教職員の組合活動の部屋として使用されているとのこと。建物の内部は、洗面台等を取り換えたり、コピー機を置いたりした以外には手が加えられておらず、傷みも少なく、工夫をこらした部屋の間取り、廊下のベンチチェスト、階段やてすりのつくり等、デフォレスト先生が住んでいらつした当手を充分にしのばせる。二階のヴェランダからは太白山の山なみと広瀬川が一望できたという。

東北学院の食堂で昼食をいただいた後、市内の関係ある場所にご案内いただいた。最初に、デフォレスト博士が創立と運営に携わった東華學校の跡地へ行った。そもそもデフォレスト一家が仙台に活動拠点を置くようになったのは、同志社の創立者、新島 襄師 (Rev. Joseph Hardy Neesima, 1843-1890) の考えた東北伝道と學校設立の構想による。デフォレスト博士と新島氏は同じ米国伝道会の任命を受け、来日の旅を共にして以来、親密な関係を保ち続けた。一八八六年、博士は新島氏と共に宮城英學校(翌年、東華學校と改称)をたてるために仙台に赴いた。東華學校は地元の強力な後盾を得て開校し、前途洋々と見えたが、新島氏は死去(一八九〇年)。欧化主義への反動による折りからの国粹主義の波を受け、短期間で閉校(一八九二年)のやむなきに至った。東華學校の存在自体を知る人さえ今ではほとんどいないという。記念碑は日本たばこ會館の一隅に建っていた。通りから見える位置に建っているものの、気にとめる人もないようで、周りには雑草が生い茂っていた。表には徳富蘇峰による學校の由来、裏には教職員名簿があり、新島 襄師の名と共に J・H・デフォレスト博士の名も刻み込まれていた。

東三番丁教会の跡

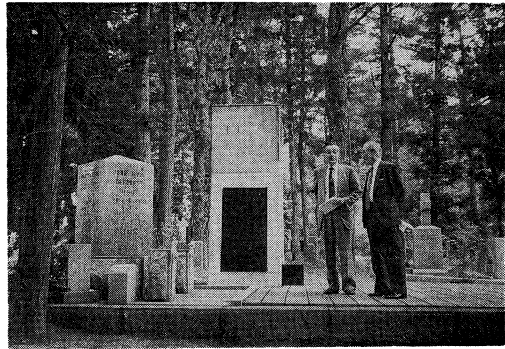
東華學校廃校後もデフォレスト博士は仙台に留まり、自らが設立した仙台東三番丁教会（現・仙台北教会）を拠点に東北伝道に身を捧げた。後年デフォレスト・メモリアル・チャーチの名を冠された教会は、現在の敷地（東勝山）に移転するまで、にぎやかな市場に隣接した一角に建っていた。現在は駐車場となっているが、敷地は当時とほぼ同じ広さで、町と町の人々と共にあった教会を思わせた。現在の教会堂は中心地からはずれた静かな住宅街の広い敷地にそのモダンな姿を見せている。

次に、東北学院の母体となった改革派の仙台教会のあった場所と、姉妹校である宮城学院の跡地を見た。現在はそれぞれ大型立体駐車場、仙台国際ホテルとなっている。

実地見学後、東北学院に戻り、松浦氏に東北学院史料室の中を見せていただき、お話を伺った。写真の整理にかなり苦労されたとのことで、一列に並んだキャビネットの中に整理されている写真類は、大きさを統一したクリアケースの中に一定の書式のメモをつけて収められ、一目で写真がわかるように工夫されていた。また、項目・事柄別に色分けしてきちんと整理・保存された史料類のキャビネットや、マイクロフィルムから紙焼きして作った本の並んでいる書架等、堅実で丹念な資料整理の様子も見せていただいた。史料類の分類・整理・保存には決定的な方法論がなく、どこも史料室でも試行錯誤で行なわれているが、写真の保管の仕方など、多くのヒントを与えていただいた。

同じ日の夕刻、「デフォレスト先生ご召天二十周年記念祭」が開催された。これは、神戸女学院同窓会仙台支部の皆様方のお世話で、翌二日(金)の午前中にわたり、仙台ホテル、北山輪王寺、仙台北教会においてとり行なわれ、参加者は、東京在住の同窓生を中心に三〇名。納谷佳世子同窓会副会長、城崎 進院長・理事長、茂 洋学院チャブレン、小玉佐智子学長、原田恵子中高部長、飯 謙大学チャブレン補に仙台支部の方々一三名と我々二名の五一名に加えて、仙台北教会牧師・五味 一先生、前牧師・故菅^{すが} 隆志師の夫人菅 千代様のご参加もあり、盛会であった。デフォレスト女史に直接教えを受けていない方々や女史を直接にご存知ない方々が出席者の半数以上を占めていたのは印象的であった。時間と空間を越えて今なお我々に与えられる女史の薫陶の賜物の大きさを思わずにはいられない。

初日の開会礼拝は、仙台ホテル四階のチャペルにおいて午後五時に始まった。池田裕子さんによる前奏に続いて一同で讃美歌二番を唱和し、司式の飯先生がガラテヤの信徒への手紙第五章一節と一三節を朗読し、祈禱を捧げられた。式辞の中で飯先生は、武田清子ICU名誉教授の「思想史的に見た昭和期の学院」(『神戸女学院百年史 各論』所収)の一節「デフォレスト先生は、一人ひとりが自主性をもって自らの果たすべき責任を充分に果たす人間となるという意味での自由を大切にされた。」を引用して、これはデフォレスト先生の「一人一人に目を向ける神」への信仰が根幹にあったからこそである、と強調された。そして、現代人は他人を操作したいという願望を持つ傾向にあるが、かえって自らの自由を失いつつあるのではないかと述べられ、女史の信仰の深さをおぼえ、真の自由を得られるよう努めなければならない、と結ばれた。女史の愛唱讃美歌二九四番を歌ったあと、城崎院長の祝福をもって礼拝は終了した。続いて若松茂登美仙台支部長の挨拶があり、三名の同窓生―篠原 愛さん、アイコ・カーターさん、加藤 董さん―が話をされた。篠原姉はデフォレスト女史の許で秘書を務められた方で、現在自分があるのは女史のおかげであると語られた。カーター姉はまず、今回の出席者中最年長の横田雅子さんご持参のデフォレスト先生の手紙を紹介され



デフォレスト家の墓前にて
城崎院長と茂チャブレン

たあと、自分が神学を学ぶことになったきっかけはアメリカでの女史との出会いであったと話された。最後に加藤姉は女史の心づかいに感動した話をされた。いずれの話からも女史の人となりをはうかがうことができた。

午後六時より会場をホテルの食堂に移して会食の一時を持った。その席では、学院からの出席者の挨拶、同窓生のスピーチがあり、女史が常に人種や国を越えた深い愛を持って人間を見ておいでであったという回想談には感嘆の声があがった。なごやかな雰囲気の中に第一日目の日程を終えた。

翌二日は、午前九時四十五分から北山輪王寺の墓前で礼拝の時を持った。

会を始める前に、司式の茂チャブレンよりデフォレスト先生のご両親についての話があった。ここで歌われた讚美歌は四九四番と二六七番。加藤 緑様の

のポータサウンドの伴奏つき（加藤姉のお母様は斉藤 栄さんⅡ高等女学部第三九

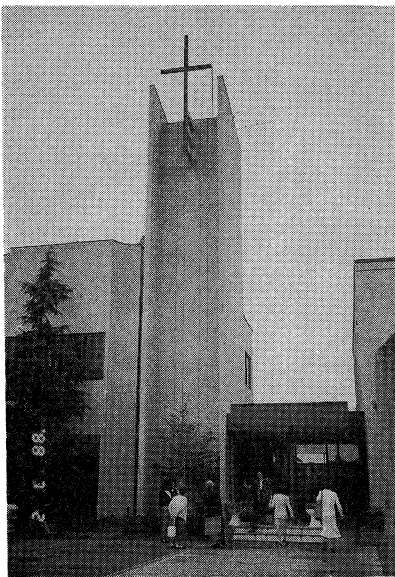
回、高等部第四一回、大学部第四四回の卒業生Ⅱで、デフォレスト先生との御縁も深かった。加藤姉より、斉藤姉を偲ぶ御本『齋藤 栄追憶集』を寄贈された。）。聖書朗読は詩篇第二三篇。これは女史帰天の時に枕元に開かれていた聖書の箇所である。

式辞では、女史の生き方には一本筋の通ったものがあり、それは永遠を見つめて進む人生の道筋であった、ということが語られた。墓前への献花、祝福をもって礼拝を終了し、墓前で茂先生に記念撮影をしていただいた。

輪王寺の庭園を散策した後、会場を仙台北教会に移して、午前十一時二十五分から記念礼拝を行なった。拝読された聖書の箇所、コリントの信徒への第一の手紙第四章七節は、女史が自らのいましめとしていた言葉。城崎院長の祈禱のあと、吉村玲子さんによる独唱、ヘンデルのメサイヤより「主はとわに活きたもう」をきき、五味先生のメッセ

「同じ人間として」をうかがった。先生は、デフォレスト先生の『わが心の自叙伝』にふれて、女史の信仰の土台はお母様、エリザベス・スター・デフォレスト夫人(Mrs. Elizabeth Starr DeForest, 1845-1915)の、自己を離れ他者に仕える信仰によっている、とお話になった。讃美歌と祝福をもって会は終了した。終了後、若松姉より仙台北教会の皆様のご紹介があり、祭壇の前で記念撮影をした。昼食後散会し、出席者は各人の予定に従って個々に帰途にいった。

我々のために貴重な時間をお割き下さり、史跡案内や示唆に富んだお話など、御親切におもてなし下さった東北学院の出村先生、竹井先生、松浦氏、また記念祭の計画・準備の段階からいろいろとお世話下さった同窓会仙台北支部の皆様にご心より感謝申し上げます。



仙台北教会